世界一の凄腕シェフが世界一有名なホテルで手掛けた世界一おいしい料理

ユッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界一の凄腕シェフが世界一有名なホテルで手掛けた世界一おいしい料理

【Ｎコード】
Ｎ３７０７Ｗ

【作者名】
ユッキー

【あらすじ】
今日はすごく大事な日。なのに、天才シェフ・リキチの機嫌は悪かった。果たしてその理由とは？

（前書き）

沖荒先生、ｂｌｕｒｄ先生との対決作品です。

今日は、このホテルが朝から騒がしい。
それは無理もない。今日は、このホテルにあの名大リーガー達が、ぞろぞろとお忍びでやってくるのだ。なので、精いっぱいのおもてなしをしよう、ということになって大騒ぎなのだ。
シェフのリーダー格であるリキチは、朝食が終わったすぐ後だというのに、自分の弟子二人を呼び、今夜のことについて熱心に話をした。
「いいか、今夜のお客は特別なオールスターなんだからな。決して無礼なおもてなしがないように……」
「そんなこと、分かってま～す」
「僕もで～す」
弟子たちの、いかにもやる気のなさそうな返事に、リキチは嫌気がさしていた。

そしていよいよその夜がやってくる。
今のところ、何もかもが順調にいっていた。料理はすぐ出てくるし、味にも満足してもらえている……と思う。大リーガーの反応からして。それに、目立ったトラブルもなく、リキチはうまくいきすぎていることに不信感を覚えた。
「ウ～ン！　グッド！」
「ワンモア！」
驚いたことは、大リーガーたちの食べる量だ。次から次へと料理が運ばれてくる。だがしかし、それを上回るペースで平らげていた。しかし、日本なりの“お作法”には苦戦しているようで、一人が日本流の独特の形の食器から食べ物をこぼし、「アウチ！」とわめい

ていた。
――子どもか！
リキチは、お子様ランチを出してやろうと思って厨房に戻ろうとした――瞬間。
「大変ですっ！」
リキチの弟子のひとりが、リキチを殴った。
「ドアホ！　大変な時に、人を殴るやつがあるかっ！」
「は～い！　ここにいま～す！」
そいつはまるで小学一年生のような元気のいい返事をし、右手を右の横に挙げた。
リキチはこいつもお子ちゃまか、と思いながら事情を聞いた。
「よし、それならローストビーフ用意しろ」
「了解しましたぁ」
ようやく一件落着、と思いきや、もう一人が今度は突然後ろからリキチの耳に息を吹きかけた。
「お子ちゃまかっ！」
「は～い。ボク、ばぶちゃんでちゅからわかりましぇーん」
リキチは、こみあがる怒りを抑えながらまた事情を聞く。
「よし、デザートだな。フルーツの盛り合わせを用意しろ」
「はぁい」
リキチにはやっと一息つく……暇もなかった。

「お待たせしました。ロースハムで～す」
そう言って最初の弟子（これから弟子1と呼ぶことにする）が、異臭を放ったロースハムを持ってきた。
「おい、お前。なんじゃありゃ」
「何って、『ロース（ハム）とビール』ですよ。名付けて、ロースハムのビール漬け」
リキチは、まだ油の付いたフライパンで弟子1の頭を殴った。
「人の話をよく聞け。ローストビーフだ」

リキチは、慎重にそのローストビーフ（？）を口に運ぶ大リーガーを見て、寒気が走った。
しかし、大リーガーの反応は意外だった。
「……！！　デリシャス！！」
――お前の味覚は麻痺しているな。フライパンで殴ればもとに戻るかな？　こうなってしまっては仕方がない。あとは成り行きに任せるしかない。
「お待たせいたしました。『フリーザー氷の盛り合わせ』で～す」
すかさず弟子2に、リキチの後ろ回し蹴りがクリーンヒットした。
「どうせならさ～このフリーザー氷でお前の耳をほじくってやりたいよね、うん」
「だってリキチさん、『フリーザー盛り合わせ』どうたらって言ってたじゃないっすかぁ」
俺はどうしていい奴に囲まれないんだろう。今、リキチの頭の中がフリーズしていた。
「イッツ・クール！」
ふ～ん。何それ、異世界語？　とろとろと氷詰め合わせのごとく溶けていくリキチ。そんなリキチを救ったのは、また弟子どものドジだった。
がっしゃーん！
リキチの耳元で、皿の割れる音がする。二人が割ったのだ。しかも、大リーガーの目の前で。どんどん大リーガーの顔が真っ赤になっていく。リキチはとうとう覚悟を決めて目を閉じた。
「はいはい～。レディース・アンド・ジェントルマン！　あ、違った、ジェントルマンだけでした。……ジェントルマンの皆さん、今からお皿割りショーの幕開けですよ！」
弟子1がそんなふざけたことをぬかすと、弟子2は木の棒を持って、その上に割れていない皿を乗せて回した。
「オオ～！」
大リーガーのご機嫌は直った。だがしかし、弟子どもはこいつら

しかできないとんでもないことをやらかした。
「よっ！」
弟子２が皿を放り投げて、割った。皿の割れる音とともに、リキチの意識もくだけた。

（後書き）

ぶっちゃけ、今皆さんが思っていることを僕が代弁します。

「面白くないね！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3707w/

世界一の凄腕シェフが世界一有名なホテルで手掛けた世界一おいしい料理

2011年10月9日15時36分発行